G・O・ロスニー『ニューファンドランドの歴史』（上）

細　川　道　久（訳）

1492年頃には科学の進歩によって世界の一体化が強まり、それは以後も続いた。西欧では、中世の小規模な政治単位が、国家と呼びうる大きな政治体へとまとまりつつあった。だが、冒険家たちが海外の新しい資源を求めて活動を開始する以前には、そうした地域のすべてを単一の政府の下におく状況にはあいにく至っていなかった。それゆえ、冒険家たちは、協力しあうことなく、競合する国家集団単位で海外をめざしたのだった。時期にはばらつきがあるが、各々の政府は彼らの支援に乗り出した。その目的は、新たに発見した地域を、ヨーロッパ全体ではなく、新しく生まれたばかりの諸国家と結びつけることにあった。政府の力がほぼ均衡している場合、国際競争とは、つまるところ、戦争であった。熟練の航海者たちによって地理的には世界が一体化に向かっていたが、政治的にはヨーロッパ人はいぜんとして分裂したままだった。ニューファンドランド（Newfoundland）沿岸の漁場が彼らの競争の対象になるのは、避けられなかったのである。

国際漁場

コロンブスが1492年に出帆する以前のおそらくは1481年に、ブリストル（Bristol）のイングランド人がニューファンドランドを発見していた。それを彼らは中世末の地図の想像上の島の名前である「ブラジル（Brasil）」と呼んでいた。1494年には、トルデシリャス条約（Treaty of Tordesillas）によって教皇の裁可を得たスペインとポルトガルは、両者間で大西洋貿易を分割した。それにも関わらず、1497年、ジョン・カボット（John Cabot）はブリストルの男たちを従え、「キリスト教徒の誰にも知られていない」土地を探して出帆した。彼は、「陸が最初に見えた場所に近い本土の１地点にだけ上陸した」のち、「アイルランドに最も近い本土の岬」まで沿岸づたいに引き返した。「この地の岬は、『ブラジル』を見つけたブリストルの男たちが別の時点に発見したものであることは間違いない。……それは、ブラジル島（Ysle of Brasil）と呼ばれており、ブリストルの男たちが発見した本土に違いないと確信されていた」（John Day, 1497-8）。ジョン・カボットがノヴァスコシア（Nova Scotia）かニューファンドランドに上陸したのかどうかは、実際には誰も知らない。それは歴史的には重要ではない。彼自身は、アジアにいると思っていたのだ。1498年に再びブリストルを立った彼は、永遠に消え去った。彼はたちまち忘れ去られてしまった。だが、19世紀末以降、彼に関する伝説がいくつも創りだされた。

1501年、ガスパル・コルテ＝レアル（Gaspar Corte Real）が（ラブラドル（Labrador）を含む）ニューファンドランドの沿岸を探検した。ポルトガルは、1494年の条約〔トルデシリャス条約〕による境界の自領側にあると誤解し、同地を併合していたのである。スペインがこれに抗議しなかったため、ポルトガルによる漁業が始まった。1501年と1502年には、ポルトガルの郷紳ジョアン・フェルナンデス（João Fernandes）は、ブリストルの旅団を北西に向かわせた。その結果、グリーンラ

ンド（Greenland）は、ラブラドル（Labrador）（小地主（small landowner））と命名され、1502年にはヘンリ７世が「ニューファンドランド（newe founde launde）にいるブリストル（bristoll）の商人たち」に褒美を与えた――ニューファンドランドの名称が使用された最初の記録である――。長い間この名称には今日のラブラドルが含まれていた。ほどなくしてフランス人漁師がポルトガル人に加わった。1535～36年、ジャック・カルティエ（Jacques Cartier）によって、ベル・アイル海峡（Strait of Belle Isle）とカボット海峡（Cabot Strait）の間の地域が本土ではないことが明らかにされた。だが、それが１つの島なのか複数の島なのかは不明だった。

1550年頃には、イングランドとスペインの漁師も毎年大勢が訪れるようになっていた。南東部の遠く離れた海洋のグランド・バンクス（Grand Banks）での「ウェット（wet）」あるいは「グリーン（green）」漁業では、イングランド人は、塩不足のために不利に立たされていた。そこで彼らは、アヴァロン半島（Avalon Peninsula）の東側のポルトガル人に混じり、塩があまり要らない「ドライ（dry）」あるいは「沿岸（shore）」漁業に専念するようになった。彼らが良好な関係を結ぼうとしたのには、明白な理由があった。

1566年のハンフリー・ギルバート（Humphrey Gilbert）の『私論（*Discourse*）』〔*A Discourse of a New Passage to Cataia*（出版は1576年）のことか〕では、ラブラドルの名称は、現在の場所を指すようになっていた。1578年、彼は、エリザベス１世から、「キリスト教徒の王族や民が現有していない土地」を領有でき、彼の入植者のための「200リーグの土地」への居住を企てようとする者を1584年まで阻止できる許可を得た。アイルランドの征服と同地への入植――イングランドの海外への帝国拡大の嚆矢――において顕著な働きをした彼は、北米に対しても同様の政策を企てていた。1583年、ニューイングランドに出帆する間際になって、ニューファンドランドの漁船団から補給を得ようとして、まずはニューファンドランドに向かうことを決意した。

彼の４隻の船隊がセントジョンズ（St. John's）の湾外に集結したが、「そこには、あらゆる国々の船が36隻はいた」。その多数が、1580年にポルトガルを手にしたスペイン王〔フェリペ２世〕に帰属していたが、残りはフランス人とイングランド人だった。全員が船上で暮らしていたため、彼は、その土地が「キリスト教徒の誰にも領有されていない」とみなすことができた。「われわれの戦闘準備は整っている」として、「200リーグ四方」を許可するよう、エリザベス女王に求めた。もっとも、それがどこまで含まれるのかは彼自身知らなかった。ニューファンドランドは「１つの島、あるいは（いくらかの見解にしたがえば）いくつかの島と起伏のある土地からなる」と信じられていた。権限が与えられた圏内にいた船は不運にも物資を供出させられた。彼は、その物資でニューイングランドに出発した。だが、彼の旗艦が海洋で難破したため、祖国に向かった。「完全に北の男になった」彼は、ニューファンドランドには翌年に戻ると語っていたが、イングランドへの帰還は果たせなかった。入植が行なわれた植民地はまだなかった。

セントジョンズの国際漁場は存続した。ついにイングランドはニューファンドランドの領有を主張したが、それは、カボットやギルバートの活動ゆえではなく、何千ものイングランド人漁師が毎年活動を続けていたからであった。だが、ギルバートの活動は、南北アメリカ全体の領有をもくろむスペインの要求と真っ向から対立するものだった。1585年、サー・バーナード・ドレーク（Sir

【地図１】ニューファンドランド島

http://www.heritage.nf.ca/nfld_fullmap.html

Bernard Drake)〔1537頃～1585年。サー・フランシス・ドレーク（1543頃～1596年）ではない〕がニューファンドランドのスペイン漁船を果敢に攻撃し、壊滅させた。その後、アヴァロン半島東岸（フェリーランド（Ferryland）とセントジョンズを含む）が、トリニティ湾（Trinity Bay）とともにイングランドに帰属することが（条約によってではないが）次第に認められていった。ニューファンドランドの残りの北部と南部の沿岸（およびガルフ（the Gulf）〔セントローレンス湾（Gulf of St. Lawrence)〕の周辺）は、フランス領であった。ハクルート（Hakluyt）の『主要航路（*Principal Navigations*)』の第２版（ロンドン、1598-1600年）に収められた世界地図の中で、ようやくニューファンドランドは、半島ではなく、単一の大きな島として示された。

1600年には、ヨーロッパの諸政府をニューファンドランド漁業の促進へと駆りたてたのは、タラの市場価値だけではなくなっていた。この漁場が世界最大の「船乗りの養成場（nursery for seamen)」であるとする見方が台頭していたのである。訓練を積んだ漁師がたえず供給されることは海上権力の強さを示すものであり、海上権力は海洋資源の管理を意味すると考えられたのである。これは、イングランドの漁船主、特に、ウェスト・カントリー（南西部地方）（West Country）（ドーセット（Dorset)、デヴォン（Devon)、サマセット（Somerset)、コーンウォール（Cornwall)）――同地の船乗り（sea-dogs）がスペインの覇権の打倒に寄与した――の商人らが育んでいた考えであった。このような理由で、イングランドもフランスも、ニューファンドランド漁場を戦略的に最重要とみなすようになった。

【地図２】ボナヴィスタ、アヴァロン両半島部

http://www.heritage.nf.ca/avalon_fullmap.html

ロンドン・アンド・ブリストル会社

スペインの弱体化につれて、イングランド、フランス、オランダ・ネーデルラントが勢力を強めていった。これらの国々の企業家たちは、海外貿易の１部を恒久的に支配しようと会社を建設しはじめていた。1600年にはロンドンの東インド会社が、1602年にはオランダ東インド会社が設立された。イングランドの事業は、スチュアート朝の祖ジェイムズ１世の即位によって打撃を受けた。1604年、彼はスペインとの戦争を終わらせ、イングランド海軍の発展を阻止したのだった。だが、スペインの海上権力も衰退の一途をたどっていた。1607年、ロンドン会社がヴァージニア（Virginia）に不安定ながら植民地を建設する一方、フランスは1605年にポール・ロワイヤル（Port Royal）（ノヴァスコシア）、1608年にケベック（Quebec）を築いた。さらに1609年、オランダがハドソン川（Hudson River）（ニューヨーク（New York））に分け入ったのに加えて、スペイン臣民の十分な占有が行なわれていない土地での交易権をスペインに認めさせた。これは、ローマ教皇が1493年に裁可した独占にもはや実効性がないことを公式に認めるものだった。オランダの貿易商人がもくろみ、かつまたスペインが占有できなかった地域の１つがニューファンドランドであり、そこへは毎

夏さまざまな国の漁船が湾を訪れていた。

だが、ロンドン商人もまた、「サック（sack）」として知られる白ワインや銀塊をスペインで取引するための魚を買い求めて「サック船（sack ships）」を送り始めていた。ニューファンドランドのイングランド人が使う海岸からオランダ人やその他の競争相手を追い出そうと、ロンドン・アンド・ブリストル会社（London and Bristol Company）を設立し、1610年、イングランド人が頻繁に訪れていたが「キリスト教徒が誰１人住んでいない」地域であるボナヴィスタ岬（Cape Bonavista）とセントメアリーズ岬（Cape St. Mary's）の間への入植（植民地化）（colonization）を認可する勅許（royal charter）をジェイムズ１世から得た。だがそれには、この海岸では「いかなる国の」漁師も従来の自由を保持すると慎重に規定されていた。

この計画は、ウェスト・カントリーの利害を当惑させた。というのも、彼らの事業は、魚の捕獲であって、購入ではなかったからである。彼らが望んでいたのは、できるだけ沢山の外国人がロンドンの人々と争って自分たちの産物を購入してくれることであり、現地居住者と魚の売却で争うことではなかったからである。さらに、入植者が海岸を占有するようになると、春にやってくるイングランドの漁師の一団が良好な干場（ship's room）（干し魚を生産するのに漁船団一行が使う、ステージ（stages）、フレーク（flakes）〔いずれも魚乾燥用の棚〕や その他の設備）を探すのが難しくなるのであった。ニューファンドランドでの入植地の拡大は、ウェスト・カントリーの経済全体の中で重要な要素となっていた漁業を崩壊させるのは明らかであったため、デヴォンとドーセットの代表は、ニューファンドランドへの入植を阻止する闘いを開始したが、それは長期化した。

1610年にブリストルのジョン・ガイ（John Guy）が「キュパーズ・コーヴ（Cupers Cove）」（現在のキューピッズ（Cupids）、ポート・ドゥ・グレーヴ（Port de Grave））に、ニューファンドランド入植者の第１陣とともに到来した時点から、この計画は庶民院で激しい非難にさらされる一方、入植者たち自身もイングランドの漁師や海賊の暴力に耐えたのだった。ブリストルズ・ホープ（Bristol's Hope）（ハーバー・グレース（Harbour Grace））とセントジョンズにも入植がひろがった。だが、植民地が夏期にイングランドからやってくる者をきちんと管轄できない以上、入植者の運命は定まっていた。1617年頃、ロンドン・アンド・ブリストル会社が、広大な土地区画を個々人に下付しはじめた。

その購入者の１人が、親スペインの国務相サー・ジョージ・カルヴァート（Sir George Calvert）であった。フェリーランド からプラセンシア湾（Placentia Bay）までの土地区画を購入していた彼は、1621年に20名の入植者を送りこんだ。ジェイムズ１世は、1623年の勅許によって、この地域に「アヴァロン（Avalon）」という名の領主植民地（proprietary Province）を建設した。この名称が選ばれたのは、「イギリスでのキリスト教の初穂にして、グラストンベリ（Glastonbury）があるサマセットシャー（Somersetshire）の旧アヴァロン（old Avalon）に模して、アメリカ側に設けたもの」といわれている。

1625年、カルヴァートはローマ・カトリック教徒であることを公表し政府を退いたが、チャールズ１世によってアイルランドのボルティモア卿（Lord Baltimore）に叙された。1627年、この新王は、フランスとの戦争に突入したが、この同じ年に、枢機卿リシュリュー（Richelieu）が、「ニュー

ファンドランド島から、グレート・レーク（Great Lake）にいたる西部までの……カナダと呼ばれるニューフランス（New France）の国土全域」を、百人会社（One Hundred Associates）に下付していた。翌年、ボルティモアはフェリーランドの「公邸（Mansion House）」に住んだが、フランスとの戦いに巻き込まれたばかりか、領民の間に蔓延していた疫病にかかった。北方のロンドン・アンド・ブリストル会社の入植地については、これ以上のことは知られていない。だが同年、私掠船船長のデーヴィッド・カーク（David Kirke）がニューファンドランドからセントローレンス川（St. Lawrence）に航行し、物資や移民を乗せていた20隻からなるフランス船団を拿捕したが、戦利品の大半は返還した。その後彼は、ポール・ロワイヤル（ノヴァスコシア）を占拠した。1629年、カークは、シャンプラン（Champlain）にケベックを明け渡すよう強要した。父親がロンドン商人で母親がユグノーの港町ディエップ（Dieppe）出身のフランス人であるこの血気盛んな男は、ニューファンドランドの初期の歴史の中で最も際立った人物となるのだが、数年間は、彼の尽力は無駄になりそうな気配だった。1629年、ボルティモア家は、少数の者を残してニューファンドランドを離れた。そして、イングランドの海上権力がおそらく最も弱かった1632年、チャールズ１世は、カークが奪取した一切をフランスに返還した。ニューファンドランドとアカディアの漁場を支配しようとする、カーク家を含むロンドン商人たちの試みは失敗したかにみえた。

ウェスタン・チャーターとサー・デーヴィッド・カーク

ウェスタン・アドベンチャラーズ（Western Adventurers）（ニューファンドランドと貿易をしていたプリマス（Plymouth）やその他西部〔南西部〕の諸タウンの商人たち）は、ロンドンやニューファンドランドの住民が漁場での伝統的慣行に二度と干渉しないよう政府から命令を得ることで、自分たちの勝利を決定的にしようとした。当時、チャールズ１世は議会を開かずに統治していたが、法務長官は「この獲得した版図においては、国王が法を定められるのがよいでしょう」と進言していた。その結果、1634年に国王が発した勅許状は、最初のウェスタン・チャーター（Western Charter）として知られている。（この規則の性格、さらには日付さえも多くが不確かである。いぜんとして「星室裁判所規則（Star Chamber Rules）」と呼ばれることもある。実際には、星室裁判所（Court of Star Chamber）は一切関わっていなかった。それは枢密院（Privy Council）の仕事であった。）初めて法的効力をもった伝統的慣行の１つとして、それは「古来の慣行に従って、最初に入港した船、ないしはその船を代表する漁師が、その港の漁船団長（Admiral）になる」と謳っていた。この漁船団長（fishing admirals）のそれぞれがその漁期の間じゅうその地位を占めたのだった。別の法律では、近年の住民に対するウェスト・カントリーの不満を反映して、「いかなる者も、漁師を供応するために、ワイン、ビール、蒸留酒、リンゴ酒、タバコを売る酒場（tavern）を設けてはならない」としていた。ウェスタン・チャーターを侵した者に対しては、８つのウェスト・カントリーの港町――重要なことに、ロンドンやブリストルではない――のいずれかの首長が裁きを下した。

しかし、ロンドンのサック船の船主たちは、希望を捨てたわけではなかった。彼らの支援を受けたサー・デーヴィッド・カークは、ハミルトン侯爵（Marquis of Hamilton）とその他２人の廷臣

を自分の公式のパートナーとした。そして彼らは、1637年、「一般にニューファンドランドの名で呼ばれ、あるいは、そう知られている、前述の本島・本島地域一帯を恒久的に」付与するという勅許を獲得した。フランス攻撃でのカークの功績が報われたのは明らかだが、同時にまた、ウェスト・カントリーを保護する条項も挿入されていた。入植者たちは、「同地で漁ができる自由」と砦を築く権利を得たが、レース岬（Cape Race）とボナヴィスタ岬の間の海岸6マイル以内に住むことは認められなかった。しかも、その領域内にある「前述の……最も適した浜辺を、漁師の到来前に占有すること」はできなかった。「かの地へ漁にやってくる」国王の臣民は、ニューファンドランドの統治当局の管轄外であり、ウェスタン・チャーターは、漁師も入植者も「神聖に順守」すべきものとされた。フランス人漁師とオランダのサック船に対しても課税できたが、この条項を履行するには、領主は新たにニューファンドランドでイングランドの船会社が通常支払うレートで契約を結ばなければならなかった。したがって、「わが領域での航行と船乗り」を増やすには、ニューファンドランドの人々と彼らを支援するロンドンの資本家たちの利害は、ウェスタン・アドベンチャラーズの利害に従属していたのは明らかだった。このような留保はあるにせよ、スチュアート王家は、ニューファンドランドで領主植民地を建設することに前向きであった。

今日、ニューファンドランド州の紋章は、1638年1月1日にチャールズ1世がカークと彼のパートナーたちに下賜したものである。ニューファンドランド投機会社（Company of Adventurers to Newfoundland）が設けられたが、そのロンドンの支配人はデーヴィッドの弟で、ラディソン（Radisson）〔ピエール＝エスプリ・ラディソン（Pierre-Esprit Radisson）〕の義父であるジョン・カーク（John Kirke）であった。サー・デーヴィッド自身は、「ニューファンドランド総督（Governor of Newfoundland）」の称号を得た最初の人物であった。100名の入植者とともに、フェリーランドを首都として選び、ボルティモアの「公邸」に住み、精力的で効率的な統治を行なった。

カークは、「漁ができる自由」という文言を広く解釈し、海岸付近での居住を禁止することは無意味だとしていた。彼の下で入植者たちは、イングランドで住民が持っているのと同じ権利を享受しているかのように行動を初めて起こした。夏期に訪れる漁師たちは、正しいと思われる制度をつねに好んでいた。というのも、彼らは、住民を恐れさせるに十分すぎるほどいつも大挙して到来していたからである。だが、ケベックの征服者〔デーヴィッド・カーク〕は、いかにして住民に自衛させ、厄介者を統制させるかを知っていた。彼はまた、徴税のために、軍艦をどう利用するかも心得ていた。

ニューファンドランドを介したヨーロッパとニューイングランドとの貿易が活発になり、同会社の利益が上がった。不運にも、この地域からは、魚と引き換えに、塩と食糧はもとより、ワインとラム酒を得ることが必要だった。これを解決するため、サー・デーヴィッドは、酒類を売るライセンスを発行したり、到来する漁師に自らが酒類を売ったりまでして収入を増やした。ウェスト・カントリーの人々の眼には、「公邸」が「一般の酒屋」と化しているとすら映ったのだった。しかも、フランス人に対する防備のためにカークがフェリーランド、セントジョンズ、ヴェルデ湾（Bay of Verde）に築いた砦は、夏期の到来者たちにとっては、自分たちへの支配を強化するものとみなされ、不評であった。

ウェスト・カントリーの側は、サー・デーヴィッドに対する過激な告発状を枢密院に送った。だが、ニューファンドランドの住民には、これまでにないほどの平和と安全がもたらされており、やがてそれは再び戻ることはなかった。1640年、同会社は、ニューファンドランド植民地の敵対者による激しい批判に応ずるため、総督のロンドン行きを手配をした。（「彼は、事業の仲間たちに不誠実に振る舞い」、そのため1640年に「解任された」と、しばしば繰り返されたが、不思議なことにその数年後にも蒸し返された。実は、彼は「解任」されてはおらず、不満はもっぱらウェスタン・アドベンチャラーズが発したものだった。）カークは、夏期の到来者の不品行を示すことで勝訴し、入植者たちプランターたちは、同会社所属の漁船が訪れるそれぞれの湾にしかるべき漁場を確保することを枢密院によって公式に許可された。ウェスタン・チャーターがあろうが植民地は成功することを、カークは証明したのだった。

共和国（コモンウェルス）の重商主義

1642年、イングランドで内乱（Civil War）〔ピューリタン革命〕が勃発した頃、ニューファンドランドは平和と繁栄の天国のようであった。入植者がたえず流入しており、ウェスト・カントリーの商人たちは、何百人もの自分たちの漁師たちが、サー・デーヴィッドの植民地へと逃げこんでいくのを仰天しながら眺めていたのである。企業利害をもつカーク家であれば、貴族に対抗してミドルクラスの側につくことが期待されたであろう。だが、ニューファンドランドでの彼らの立場は、国王側に全く依りかかっており、国王の個人的な友人になっていた。他方、ウェスト・カントリーの港町は、自分たちが強い影響力を持っていた議会の側を大々的に支持していた。彼らが勝利を収めると、あらゆる機会を利用してカークを王党派（royalist）だと糾弾した。1650年の時点で、1637年の４人の領主――うち２人は、国王と同じく、1649年に処刑された――の中で、たった１人生き残ったのが、彼だった。（ハミルトンは、1648年にスコットランド軍をイングランドまで率い、クロムウェル（Cromwell）によって捕縛された。）1651年、サー・デーヴィッド・カークはついにフェリーランドで捕えられ、囚人としてイングランドに送られた。またもやニューファンドランドは、ウェスタン・アドベンチャラーズによって完全に牛耳られることになった。

同年、哲学者トマス・ホッブズ（Thomas Hobbes）は、「技術（Art）によってコモン－ウェルス（Common-wealth）あるいは国家（State）とよばれるあの偉大なリヴァイアサン（Leviathan）が創造される」〔ホッブズ『リヴァイアサン（一）』水田洋訳、岩波書店、1954年、37頁〕と記していた。カークはそのような技術者（artist）であった。彼は、ニューファンドランドで国家建設の事業を始めたのだった。だが、彼の植民地の「リヴァイアサン」は、クロムウェルの軍隊が祖国イングランドでイングランド人のために築いたもう１つの「共和国（Commonwealth）」によって今や崩壊したのだった。その恩恵は、後に西欧やアメリカが生み出す政治的社会的民主主義の場合と同じく、国境の中でのみ適用することが意図されていた。それは、分け隔てなく人類に適用される抽象的原則ではなく、けっして植民地人や外国人に共有されるものではなかった。1648年のイングランドにおける革新勢力の勝利は、1651年のニューファンドランドでは、暗澹たる反動を意味したのである。

統治の目的は、商人や庶民院の郷紳が解していたように、イングランド人の蓄財を支援することにあり、議会はスチュアート朝第１期よりも効率的に進められていた。既に実際の根底にあるイデオロギーとはナショナリズムであった。サー・デーヴィッド・カークは、フェリーランドに戻ることを許されたものの権力は奪われており、1654年、ニューファンドランドの真の建設者は死亡した。非凡な人生は終ったのである。彼と彼の植民地は、今日「重商主義」と呼ばれている経済ナショナリズムの刻印がうたれた祭壇の上にイングランド政府によって安置された最初の犠牲者の１人だったのだ。

クロムウェルの重商主義的統治の目的は、特に諸外国や植民地の競争相手を犠牲にして利潤を得ることであった。ニューファンドランドに関する限り、この政策の恩恵を最も受けた圧力集団は、ウェスト･カントリーの漁船主であった。今や彼らは、国家の積極的な支援に依存できたのである。

初期の歴史家（D･W･プラウズ（D. W. Prowse)、1895年）〔Daniel Woodley Prowse (1834-1914), *A History of Newfoundland from the English, colonial, and foreign records,* 1895.〕が、「議会党（Parliament Party）が植民地に任命した」行政官（Commissioners）を「最初の真の総督」としたのは誤りだった。プラウズに倣った教科書では、ジョン・トレワージー（John Treworgie）を「行政の長」で「善良で賢明な統治者」とし、「７年間、ニューファンドランド島民は、漁船団長と商人から守られた――これは、悪政と圧政の悲惨な歴史の中で輝かしい一時代だった――」と述べている。事実は逆である。サー・デーヴィッド・カークの統治をやめさせるために、行政官が1651、1652、1653年に派遣されたが、「今夏の漁場が閉まる」たびに毎年帰還せよとの指示を受けていた。その１人であるトレワージーは、1659年頃まで滞在していたが、共和国政府には承認されず、俸給も支払われなかった。（プラウズによれば、トレワージーは、「ニューファンドランドにいるニューイングランド商人にとっての主たる代理人であった。」）彼の権限は、あったとしても、弱いものだった。ニューファンドランドの統治に関しては、クロムウェルの時代は悲惨であった。同島の歴史の中で最も急激な転換期を画していたのである。

以後の政治展開のすべては、この時期に採用された政策によるものだった。今やウェスタン・アドベンチャラーズの背後には、彼らのために進んで介入する意向をもったイングランド政府がいた。介入策としてのクロムウェルの最も重要な新制度とは、ウェスト・カントリーの漁船に随行する常設の護送船団制度（convoy service）を設けることだった。護送船団長（Commander of convoy）（あるいは、「指揮官（Commodore)」と呼ばれた）は、ニューファンドランドの監督権を行使するウェスト・カントリーの港町の首長にとって代わった。興味深いことに、これは後に政府が再び伸長していく萌芽となった。指揮官は、少なくとも夏の間はある程度の権限を掌握しており、その権能は次第に強まり、数世代後には、完全な民政の首長としての総督（royal Governor）となった。

だが、王党派の攻撃に備えて護送船団が設けられた1649年、あるいは、スペインとの戦争初年に護送船団長への指令の準備がなされた1656年には、共和国には、そうした意向は全くなかった。それどころか、カークの政府はもとより、彼の砦も取り壊されたのである。初めて熟慮がなされたのは、入植者全員を排除する提案であった。結果として、冬期の入植者の存在は無視され、夏期の間のみ政府が監視するという先例がつくられた。ここには、異例な形態の帝国主義がみられた。官吏

の眼には、「ニューファンドランド」は、春に海洋を西に移動し秋にイングランドに帰郷するイングランドの漁船団としてしか映らなくなっていたのである。

重商主義の理論からすれば、漁船主をこのような形で支援することは、タラ漁は本国の事業であって植民地人には不適切な事業だという主張によって正当化された。ニューファンドランドの人々はほかに職業もなく、彼らの存在は望ましいとは思われていなかった。産業は、むしろ国家の対外貿易の１部であり、その産品は外国人に売り、そのお金は、イングランド西部〔南西部〕を豊かにするために本国に運ぶものだった。副産物として生まれたのが、鍛えられた船乗りであり、彼らは、海軍――勿論、重商主義政策全体にとって最も重要な海上権力――の要員になったのである。

王政復古期の重商主義

ニューファンドランドの入植者たちは、イングランド政府の支援を得た利害をもつ漁船主たちからは望まれなかった。だが、恒久的な居住者は実際には存在していたどころではない。彼らは、もう１つのイングランド商人グループであるロンドンのサック船の船主たちの支援を受けていたのである。このため、重商主義の観点からみて、状況は複雑であった。原則上公式の承認を受けていない植民地の貿易を統制することは不可能だった。望ましくない状況の存在を認めないだけでは、それは満足のいくように処理することはできなかったのである。

住民の数は、いぜん増え続けていた。「小舟操業（byboatkeeping）」として知られるカークが導入した制度はなお実施されており、この制度の下で、ロンドン商人は個々の漁師たちを財政支援した。彼らは乗客としてニューファンドランドに向かい、同地では小船と低賃金労働者を使って魚を採らせ、それをサック船に売ったのだった。雇われた彼らは入植者となり、「主人（masters）」と「奉公人（servants）」からなる２階級の社会が発展した。ウェスト・カントリーの漁場ではつねに取り分払いであったのに対して、小舟操業者（byboatkeepers）には賃金が支払われた。

共和国の重商主義は、矛盾はいくつかあるにせよ、チャールズ２世の王政復古後に強化された。1661年に２度目のウェスタン・チャーターが発布され、1634年のウェスタン・チャーターを確認するとともに、ニューファンドランドに小舟操業者を送ることを禁止する条項が付け加えられた。同年、新国王〔チャールズ２世〕はまた、祖父王〔ジェイムズ１世〕によるカルヴァート家へのアヴァロンの下付（1623年）も確認した。第２代ボルティモア卿（メリーランド（Maryland）の領主）が、1629年に父親が残したフェリーランドの再占有の意図を公言した。これが実際に意味することは、建設事業に数年を費やしたデーヴィッド・カークの家族が、今度は地代を払わねばならないということだった。にも関わらず、カーク家は、その地に留まって住民と運命をともにする決断を下した。同家はニューファンドランド人になっていたのである。ボルティモアは、入植地を訪れることすらせず、１年かそこらで再び関心を全く失くしてしまった。かくして、ニューファンドランドの領主政府は失効の道をたどるしかなく、復活することはなかった。カーク夫人は「公邸」に戻ってきたが、息子のジョージ・カーク（George Kirke）が父親の権限を再主張することは法的に不可能なままであった。

これらの出来事と時を同じくして起きていたのが、ルイ14世とコルベール（Colbert）によるカ

ナダの再編であった。強力な重商主義指向の彼らは、ニューファンドランド南部の植民地化は、同地の漁場とケベックへのルートを守ることで、フランスの貿易と航海を促進すると確信していた。1662年、総督がフランス人入植者とともにプレザンス（Plaisance）（今のプラセンシア（Placentia））の要塞化のために到来した。情報に通じたイングランドの指揮官（船長）によれば、同地は「世界で最も至便な港湾で最も素晴らしい浜辺」を有していた。フランスと１世紀以上にわたって同盟関係にあったイングランドの最後の統治者であるチャールズ２世とジェイムズ２世は、南部沿岸全域の支配と北部・西部の沿岸全域での漁業権の独占を求めるフランスに対して異議を唱えようとはしなかった。「ニューファンドランド（テール・ヌーヴ）（Terre-Neuve）」〔ニューファンドランドのフランス語名〕は、教権上はケベック司教（Vicar Apostolic）ラヴァル（Laval）の下にあり、政治上はカナダの１部であった。

他方、公式政府をもたないニューファンドランドのイングランドの側は、国際貿易の重要な中心になっていた。そうなったのは、関税官吏がいなかったからである。1663年の議会法は、ニューファンドランドで唯一課税しうるタラに対していかなる税金を課すことも禁じていた。これは、政府の復活はありえないことを全く明らかにするものだった。同年可決したステープル法（Staple Act）は、ヨーロッパの商品をまずイングランドに送らない場合は、イングランドの植民地に送ることは違法とした。だが、ニューファンドランドは、公式には植民地ではなく、したがって、航海諸法（navigation laws）が同地での施行を意図していたかどうか、誰にもわからなかった。いずれにせよ、ステープル法は、漁業用の塩には適用されなかった。塩のためにヨーロッパの港に寄港するサック船は、他の多くの商品も運び、魚以外の物資を持ち帰った。17世紀から18世紀にかけて、フランス人、イングランド人、ニューイングランド人はこぞってこの例外的な機会を活用して、国際自由貿易を行なった。それは利益が多かったため、数名の有能なニューイングランド人の中には、政治・社会状況が好ましくないにも関わらず、実際にセントジョンズで住まいを構え、ニューファンドランド社会の指導者になった者もいた。イングランドを帝国の配給センターとする企てのなかでこうした重要な例外を認めていたことは、イングランド政府の眼には、ウェスト・カントリーの漁業商人の利害の方が、国家の経済的自給自足原則よりも重要に映っていたことを示している。

その間、イングランド人の入植者たちは被害にあっていた。ウェスト・カントリーの漁師たちは、入植者に対して好き勝手に略奪・殺害を行ない、「酒蔵（tippling houses）」に入れてあったものを空にした。1655年に、オランダ人がセントジョンズやその他の入植地を襲撃したが、プレザンスまでは行かなかった。３度目で最後となる英蘭戦争で、彼らはフェリーランドを不法占拠した（1673年）。だが、その後彼らがニューファンドランドを去ると、イングランドとフランスがヨーロッパを牽引するようになり、両国によってニューファンドランドの歴史が始まった。

だが、北アメリカ側の影響も感じられるようになっていた。プレザンスは、既にカナダの１部となっており、イングランド人の港湾には、ニューイングランドの船が頻繁に訪れていた。ニューファンドランドの人々は、食糧やその他必要な物資をマサチューセッツ（Massachusetts）からの船に依存していた。彼らは、魚と引き換えにラム酒を買うことを強いられた。それを地元のスプルース・ビール（spruce beer）と混ぜると、悪天候の時に体を温められると信じられていた。次第にそれは、

ほぼ一般的に消費されるようになり、その影響に混乱と堕落が加わり、それは年々深刻になっていった。状況が悪くなると、入植者のうち「最も主だった面々」がニューイングランドに移動した。貧しき者たちもこれに倣おうと野心を抱いたがうまく行かず、当時発展していたフランス入植地の秩序ある環境で新たな生活を始めようとした。

「自然状態」

トマス・ホッブズは、次のように書き記していた。「人々が、かれらのすべてを威圧しておく共通の力なしに、生活している時代には、かれらは戦争（warre）とよばれる状態にあるのであり、かかる戦争は、各人の各人にたいするそれなのである」〔『リヴァイアサン（一）』、202-203頁〕と。平和と繁栄が存在しうるのは、1つの受け入れられた統治――秩序を維持するための疑問の余地のない権力をもつ――が行なわれている地でのみである。同じ地域をめぐって支配を築こうとする2つの独立した政府がある場合には、戦闘と破壊が起きる可能性がたえずある。戦闘と破壊はまた、全く政府がないところでも起こりうる。というのも、各人の「各人にたいする」「自然状態」があるからだ。いずれの場合も、戦争という状態であって、純粋な平和の状態ではない。1651年以降のニューファンドランドの人々は、両方の意味での「戦争」を経験していた。正常な文明化した社会は、1824年まで回復することはなかったのである。

国王チャールズ2世の下での公式の政策は、無防備状態に対するオランダの襲撃を招いた一方で、住民社会の法・秩序の完全な破壊をもたらした。イングランドの海上権力は、入植者の競争のない「船乗りの養成場」としてのニューファンドランド漁場を守れるかどうかにかかっているとする神話は、無条件で受け入れられていた。この見方はしばしば公言されていたために、たとえ真実ではないにせよ、ほとんど誰しもが信じていたようだった。

1671年、枢密院令が発せられ、ウェスタン・チャーターは改正された。その狙いは、海岸から6マイル以内に入植者が住むことを阻止し、漁船団長（第1到来者）、漁船副団長（vice admirals）（第2到来者）〔通常は「中将」の意〕、漁船団長補（rear admirals）（第3到来者）〔通常は「少将」の意〕に「ニューファンドランドでの犯罪をおかした違法者」を逮捕できる権限を与えることにあった。この第3次ウェスタン・チャーター（実際に発布されたのは1676年だった）に先んじて、護送船団の指揮官は、1675年、ニューファンドランド住民に対して、イングランドか西インド諸島に連行されることになるだろうと警告した。だが、彼は本国に戻ると、この新しい政策は不可能であるか、もしくは望ましくないと、率直に報告した。彼は、ウェスト・カントリーに言及して、彼らが住民についての数々の虚偽報告を国王に行なっていると伝えた。サー・ジョン・ベリー（Sir John Berry）によるこの報告は、指揮官が次第に総督の役割を果たすようになる過程の始まりを画していた。この時以来、指揮官には海岸での状況を毎年報告することが命じられた。

1676年、および1678年に、ウェスト・カントリーの漁師たちは、レース岬とボナヴィスタ岬の間にある住居をことごとく破壊し、住民から横領・略奪した。財産の一切を破壊されたジョン・ダウニング（John Downing）やトマス・オクスフォード（Thomas Oxford）ら激怒したニューファンドランド住民は、ついにロンドンに赴き、ニューファンドランドからの追放命令は無期限に停止す

べきだとする断固たる決意で、住民の事情を訴えた。

この時には、入植者たちは完全に混乱していた。指揮官は、2000人たらずの英語系住民の大多数は「男性奉公人（men servants）」だと分類していた。世俗面、宗教面とも当局がなかったため、主人（masters）の場合でも結婚の儀式は行なわれなかった。セントジョンズでは、（ジョン・ダウニング家を除いて）家屋はすべて酒場同然であった。冬の間じゅう「あり金を飲みつぶす」しかないでいた。唯一文明的な暮らしがみられたのはフェリーランドで、それはサー・デーヴィッド・カークの未亡人と妹が勇敢にも指導的役割を果たしていたからであった。

「名誉革命（Glorious Revolution）」（1688 ～ 89年）は、ニューファンドランドにとって、もう１つの災難であった。というのは、フランス人をイングランド人の敵に変え、敗北し貧困となったアイルランド人の大量移民を招き――貧困が別の貧困に変わっただけだった――、ウェスト・カントリーの影響が強い議会の重要性を高めたからである――ニューファンドランド住民は全く代表を送っていなかった。愚かにもフェリーランドの私掠船が1690年２月のとある夜に猛攻撃をしかけてプラセンシアを襲撃し、総督を拷問にかけ、セントジョンズまで銃を持ち去った。ニューファンドランドでは、その後の長きにわたる破壊的戦闘では、フランス人の方が優位に立った。だが、あるイングランド人が「つねに土地は、海上で優れた者の側にあろう」と言ったが、それは全く正しかった。

フランスは、商業に打撃を与えればイングランドは衰退するだろうとみていた。総督フロンテナク（Frontenac）は、モントリオール（Montreal）生まれのピエール・ルモワイン・ディベルヴィル（Pierre LeMoyne d'Iberville）を兵士やインディアンとともに送り、1696年にはアヴァロン半島のイングランド入植地をことごとく破壊した、ついにイングランド政府は、防衛方針を変え、これまで１軒たりとも家屋が建てられなかったセントジョンズにウィリアム砦（Fort William）を建設しはじめた。２年後になっても、あるイングランド人の大佐は、南部には「人っ子１人住んでいない。ニューファンドランドで最も良質な湾で最も快適な場所だとつねに言われてきた――私もそう聞いてきた――フェリーランドもだ」と報告していた。1696年にデーヴィッド・カーク（David Kirke）〔サー・デーヴィッド・カークの子〕がプレザンスで囚われの身のまま若くして死亡すると、この華々しい家系はついに絶えた。1629年のケベック奪取に対する報復がなされたのである。

統治組織がないことで生ずる混乱に加えて、２つの政府どうしの武力闘争による恐怖がニューファンドランドにもたらされた。共通の政府がなく、人々を皆畏怖させるような想像上の「自然状態」におかれた人間についてのトマス・ホッブズの有名な記述にならえば、社会の様子はこうであっただろう。「技術（Arts）も文字（Letters）も社会（Society）もない。そしてもっとわるいことには、継続的な恐怖と、暴力による死の危険とが存し、人間の生活は、孤独で、まずしく、険悪で、残忍で、しかもみじかい」〔『リヴァイアサン（一）』203-204頁〕。彼が指摘するように、「強力（Force）と欺瞞（Fraud）とは戦争においては、ふたつの主要な徳」であった〔『リヴァイアサン（一）』、206頁〕。

本稿は、G. O. Rothney（Gordon Oliver Rothney）, *Newfoundland: A History,* Ottawa, 1953, 3rd.

ed., 1973.の全訳（前半部）である。

〔　〕は訳注。なお、訳出にあたっては、G. M. Story, W. J. Kirwin & J. D. A. Widdowson（eds.), *Dictionary of Newfoundland English,* 2nd ed. 1990, rep. Toronto, 2006.を適宜使用した。

【付記】本稿は、2014年度日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。